

【争点C-1】 100 mSv以下の被ばくによっては小児甲状腺がんは発症しないのか？

| 被告 | 主張部分 | 原告 | 主張部分 |
|---|------|---|---|
| 100 mSv以下の被ばくでは小児甲状腺がんは発症しない。その根拠はつぎのとおり。 | | 被告の100mSv閾値論は理由がない。その根拠は次のとおり | |
| 1 100mSv以下の被ばく線量では、放射線による発がんリスクの明らかな増加を証明することは難しいとするのが「国際的合意」である。 | | 1 (被告の主張1に対する反論) | |
| (1) WG報告書 | | (1) WG報告書の内容は信用できない。 | (30)2～5頁 |
| (2) 連名意見書 | | (2) 連名意見書の内容は信用できない。 | (30)5～6頁 |
| (3) UNSCEAR | | (3) UNSCEARは、報告の内容自体がずさんである上、公正・中立な組織ではない。 | (2)13～18頁、(22)、(24)、(34) |
| (4) ICRP | | (4) ICRPは原子力の利用を促進する立場の組織である。ICRPも低線量被ばくによる健康影響を認めている。 | (20)10頁、24～27頁、(39)29～31頁 |
| | | 2 (原告の積極主張) 100mSv以下の低線量でも発がんリスクが増加するという多くの研究結果がある。 | |
| | | (1) ①ルビン論文、ベイガ論文 (甲状腺がんについて) | (3)10～13頁、(12)16～19頁、(21)24～25頁、(27) |
| | | ②トロンコ論文 (甲状腺がんについて) | 訴状63～64頁 |
| | | ③NCRPコメンタリー-27 | (12)17～19頁 |
| | | ④VEIR-VII | (20)10～14頁、(39)27～28頁 |
| | | ⑤JNCIモノグラフ | (20)15～24頁、(39)28～29頁 |
| | | ⑥Grant論文 | (20)27～30頁、(39)12～13頁 |
| | | ⑦INWORKS | (20)30～33頁、(39)21～25頁 |
| | | ⑧山下論文 | 訴状64～65頁 |
| | | (2) LNTモデルは国際的合意である。 | (9)22～31頁 |
| | | (3) 100mSv閾値論は統計的検出力の問題にすぎない。統計的有意差検定によって「有意差がない」とされることは、因果関係がないと結論づけられるものではない。 | (14)16～21頁、(21)33頁、(32)8～11頁、(39)9～12頁、 |
| | | (4) LSS14報で小笹氏が行った解析方法は、低線量域で統計的有意差が出ないように工夫されたものである。LSS14報は、しきい値のないことを明らかにしている。放影研では、2000年には、がんが100mSv以下でも増加することが研究成果として公表されている (Pierce 2000)。 | (39)13～21頁 |
| | | (5) LSSは成人の全固形がんの増加を観察する研究である。1950年代のアリス・スチュアートの症例対照研究によって、わずか10mSvの被ばくで小児の白血病、その他のがんの発生率が2倍になることが広く知られている。 | 甲全415号証 (主張予定) |
| | | (6) 数値解析の方法として、線量範囲を限定して解析するのは、ICRP、放影研の独特の解析方法であって、一般的とは言えない。 | (39)16頁 |
| | | (7) 仮に線量範囲を限定して数値を解析する手法を用いたとしても、遅くとも2020年にはHauptmannらの論文によって、100mSv以下におけるがんリスクの増加があることが明らかになっている。ICRP2020も、この事実を認めている。 | (39)28頁 |